天高第１号古墳

広島県豊田郡本郷町南方字天高所在古墳の調査

1983

(財) 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1、本書は昭和57年12月から昭和58年２月初旬まで実施した豊田郡本郷町南方字天高所在の天高（てっこう）第１号古墳の発掘調査報告である。

2、調査は（財）広島県埋蔵文化財調査センターが本郷町から委託を受けて実施した。

3、本書の執筆は沢元保夫（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－１・Ⅳ－２・Ⅴ）と梅本健治（Ⅲ－２・Ⅳ－１）が分担し、沢元が編集した。

4、出土遺物の実測は梅本・沢元が当たり、遺物写真撮影・整図等は沢元が行った。

5、出土遺物のうち断面黒ヌリは須恵器・白ヌキは土師器・斜線は鉄製品である。

6、第１図は国土地理院発行の１：25,000の地形図（竹原）を使用した。

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）
Ⅱ　位置と環境……（2）
Ⅲ　調査の概要……（6）
　　1　古墳……（6）
　　2　調査区北部の遺構群……（11）
Ⅳ　出土遺物……（14）
　　1　土器……（14）
　　2　鉄製品……（16）
Ⅴ　ま　と　め……（19）

Ⅰ　はじめに

本報告は、本郷町立南方小学校敷地造成工事に係る天高第１号古墳の発掘調査報告書である。現在南方小学校は国道２号線沿いにその校舎をかまえている。しかし近年、企業誘致等に伴う町内人口の増大によって児童数が増加したことと現校舎の老朽化等のため現施設での児童受け入れが困難となってきた。そこで現在地から南東約 650m の南方字天高への移転計画が提出され、昭和57年度中の造成工事計画が進められてきた。この過程で、昭和57年10月本郷町教育委員会より広島県教育委員会(以下県教委)に対して、本郷町南方小学校敷地造成工事に係る文化財等の有無ならびに取扱いについての協議があった。これをうけて県教委では現地踏査及び試掘調査を実施し、敷地内に２基（天高第１・３号古墳）、近接して１基（天高第２号古墳）の古墳を確認した。このため２基の古墳の取扱いについて協議を重ねた結果、第３号古墳については設計変更により現状保存し、敷地中央にある第１号古墳については設計変更が不可能なため事前に発掘調査を行うこととなった。そこで本郷町は昭和57年12月20日文化庁長官あてに埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の実施について通知し、調査を（財）広島県埋蔵文化財調査センター（以下埋文センター）に委託した。調査の委託を受けた埋文センターは調査員２名を現地に派遣し、昭和57年12月10日～昭和58年２月４日まで延べ４週間にわたって発掘調査を実施した。

本郷町は「古墳の町」と呼ばれ、史跡に指定され県内でも代表的な古墳である御年代古墳をはじめとして県史跡貞丸第１・２号古墳、梅木平古墳など多くの古墳が所在している。しかしその発掘調査例は少なく、これまでには福礼古墳、陣べら遺跡群、横見廃寺跡の調査が行なわれていたにすぎない。このためその成果に期待がよせられていたが、調査の結果、当古墳はすでに盗掘を受けていたものの石室内及び墳丘等から、須恵器、土師器、鉄製品の出土をみ、大きな成果をあげることとなった。

なお調査にあたっては、広島県教育委員会、本郷町教育委員会、本郷町文化財保護委員会、地元北方・南方地区の方々から御協力、御教示を得た。記して感謝の意を表すものである。

Ⅱ　位置と環境

本古墳は天高古墳群（６基）中の１基で、豊田郡本郷町南方字天高に所在する。標高 103.6 m の丘陵頂部から南東へ派生する尾根上標高70m の位置に立地している。

古墳の所在する本郷町は広島県の南部東寄りに位置し、面積 82.57㎢、人口10,045人（昭和57年４月１日現在）を擁する。町域は旧本郷町・舟木村・北方村・南方村が合併して形成されたものでそのほぼ中央を国道２号線が横断している。町の中心部は、世羅台地に端を発し三原市で瀬戸内海に注ぐ沼田川が支流を集め東へ曲流するあたりの開けた低地部にあり、背後の丘陵裾部へ続いている。従来本郷町には特筆すべき産業はなく、沼田川及び各支流によって形成された沖積低地や丘陵部の可耕地で水稲耕作・畑作が行われる純農業地帯となっていた。しかし、1964年(昭和39年)備後工業整備特別地域に指定を受けて以後、交通・水利・土地条件の有利さを利用して、企業進出が進められ東洋製缶などの工場が建設されている。現在ではこれらの工業製品が、産業生産額の第１位となっている。また本郷町は三原市への通勤圏にあり、近年三原市のベットタウン化の傾向がみられ団地建設等の宅地開発がめだってきた。最近では、北部の用倉地区が広島新空港の候補地となっている。

本郷町は『古墳の町』と呼ばれるように注目すべき古墳の多い地域である。以下本郷町の遺跡について概観する。

旧石器時代に属する遺構、遺物については未発見である。

縄文時代になると数遺跡で土器が採集、出土している。しかしその土器は後期に属するものばかりでそれ以前のものは知られていない。片山遺跡、平坂遺跡、横見廃寺跡下層がそれである。片山遺跡からは土器の他に石鏃、礫石錘が出土している。この時期の遺跡はいずれも河川近くの低地にあり、自然堤防のような微高地に立地していたものと考えられる。

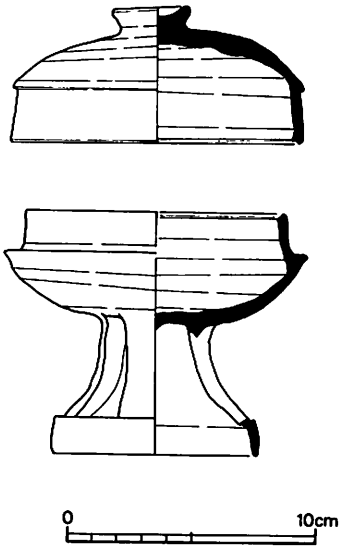
弥生時代には遺跡がかなり増加する。後期に属する遺跡が多く、前期の遺跡としては中山遺跡がある程度である。後期の遺跡としては新庄庵遺跡、塔の岡遺跡、麓遺跡、陣べら遺跡等があり、数ヶ所に地点が分かれ小貝塚を伴う遺跡もある。新庄庵遺跡は標高 150m の高所にあり高地性集落の一つとみなされている。[1]　陣べら遺跡は発掘調査が行われており、後期末～古墳時代初頭にかけての墳墓群がみつかっている。この他に墳墓として知られる遺跡に舟木遺跡がある。地元では甕棺古墳と呼ばれている。土器を立てて、その周囲に河原石を積んでいるもので、[2]現在では中の土器は打ち欠かれ底部近くが残存するのみである。同様な構造のものが２基近接して所在している。

古墳時代になると遺跡数は激増する。町内には約 170基以上の古墳が所在するが、この内、約40基が箱式石棺、約40基が横穴式石室を内部主体としていると推察されている。[3]最も古いとされるものは、鍛冶屋迫第４号古墳である。５世紀初頭の築造とされ、墳形は前方後円をなし内部主体は箱式石棺である。出土遺物としては、画文帯神獣鏡（中国三国時代）・勾玉がある。

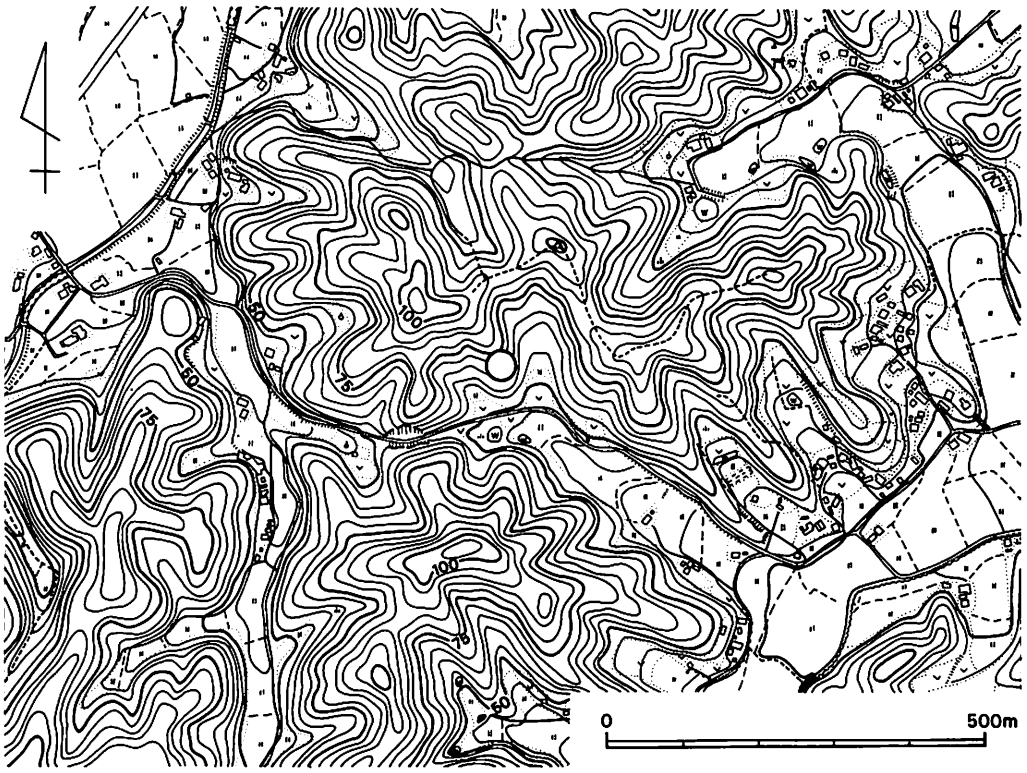
1．天高古墳群　2．貞丸古墳群　3．梅木平古墳群　4．横見廃寺跡
5．天神古墳群　6．鍛冶屋迫古墳群　7．宮地川古墳群　8．新庄庵遺跡群
9．ユウゼン古墳群　10．峠越古墳群　11．糺津古墳群　12．杉臼古墳群
13．大谷古墳群　14．大菜原古墳群　15．矢跡古墳群　16．神ノ木古墳群
17．中山古墳群　18．丸山古墳群　19．西山古墳群　20．東谷古墳群

第1図　周辺遺跡分布図

また、５世紀代の築造とされる福礼古墳は、三原市との境にある。円墳で内部主体は粘土槨内に割竹形木棺を納めたものである。出土遺物としては鉄刀・刀子・円筒埴輪がある。[5] 埴輪を持つ古墳としては、片側古墳・土肥谷第２号古墳がある。第２図は当古墳東方の杉臼団地内に所在した古墳から出土した須恵器（有蓋高杯・杯蓋）である。[6] 古式の形態を示し、本調査で出土した高杯と近い時期のものである。６世紀後半に横穴式石室が採用されて以後は、史跡御年代古墳、県史跡の梅木平古墳・貞丸第１・２号古墳・大菜原第４号古墳・矢跡第４号古墳・土肥谷第１号古墳等がある。御年代古墳は、２棺の刳抜式家形石棺が前・後室に納められる複室を有し、金環・金銅馬具・装飾付須恵器など数多くの遺物が出土している。[7] 梅木平古墳は、県内最大の横穴式石室で間仕切り石で羨道と玄室を分けており、玄室は複数との見方もある。羨道の一部を欠くものの、奥行13.1m、幅2.9m、高さ 4.2m の規模を有している。６世紀末～７世紀初頭の築造と考えられている。[8] 家形石棺を石室内に納めてあった貞丸第１・２号古墳は両墳ともほぼ同様な構造で類似点



第２図　周辺古墳出土土器



第３図　天高第１号古墳位置図

が多く玄室入口に間仕切りがみられる。6世紀末～7世紀初頭に比定されている。装飾付須恵器を出土した古墳には船木所在の平坂古墳がある。また土肥谷第1号古墳からは、須恵器・圭頭柄頭を出土している。以上のように本郷町には多くの古墳が所在し、その形態・規模・内部主体には様々なものがあり、今後の詳細な検討・研究が必要であろう。また御年代古墳・梅木平古墳・貞丸第1・2号古墳などは、畿内系の石室構造を有しており、その被葬者やその所属集団に興味が持たれる。

歴史時代の遺跡には史跡に指定された横見廃寺跡がある。[10] 白鳳時代の寺院跡で重弧文の軒平瓦・複弁蓮華文の軒丸瓦・文字瓦等の瓦類の他、須恵器・土師器が出土している。しかしながらその伽藍配置はいまのところ明確ではない。横見廃寺跡の付近には和名抄郷・梨葉郷があり古代山陽道が東西に通っており梨葉駅が町内に設けられていた。本郷町は沼田庄の中心を占める場所にあたり、平安時代には沼田氏の勢力がおよんでいた。この間に沼田氏の祖である藤原倫実は楽音寺を創建している。沼田氏が壇の浦の合戦で滅びて以後は、小早川(土肥)氏が地頭職に任ぜられ、小早川茂平の時に本郷に来住し、高山城を築城した。一時は大内氏に攻められて落城したが、天文19年に毛利元就の三男隆景が沼田小早川家を相続し、毛利氏の勢力下に入った。隆景は本拠を高山城から対岸の新高山城に移した。新高山城は、いわゆる中世から近世への過渡期の山城といわれ、史跡に指定されている。

註

1. 三原市『三原市史』通史編　1977
2. 潮見浩「広島県豊田郡舟木遺跡」『日本考古学年報』9　1961
3. 県教育委員会の分布調査カードによる。
4. 前出1.
5. 広島県教育委員会『福礼古墳発掘調査報告』1973
6. 本郷町公民館展示のもので、稲葉桂氏所蔵
7. 広島県教育委員会『広島県文化財解説図録』1979
8. 注7に同じ、芸備友の会『広島県の主要古墳』芸備第9集　1979
9. 広島県比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』1979
10. 広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　1971、1972、1973

Ⅲ 調査の概要

古墳は既に盗掘を受け玄室部には雑木が生えており、側壁・奥壁の一部が露出していた。残存していた二枚の天井石は原位置を保っておらず移動されていた。また石室後方には直径約4m程の大きな穴が2m以上掘込まれており盗掘坑に類するものと思われた。

調査は墳丘を石室の主軸方向に合わせ4分割して行った。まず墳丘盛土・掘方を確認するためにトレンチ（T1～T3、なおT4は試掘トレンチ）を設定し掘下げを進めた。表土（10～20cm）の下は、直に地山層となっており盛土は認められなかった。T3トレンチでは地山面が大きく段状に掘込まれていた。次に表土削平を行ったが、この時点で石室後方の攪乱坑の南際より須恵器4点（高杯3、杯身1）、刀子1点が集中して出土した。またT4トレンチを北へ伸ばしたところ土坑2基の断面が検出された。そこでその部分の調査区を拡張したところ、新たに溝状遺構が検出され、数点の須恵器片が出土した。

横穴式石室内部は盗掘を受けていたため荒されておりいくつかの石が転落していた。少し掘下げた時点で石室前半部を中心に木炭を含む層が検出され、杯身（土師器）が1個出土した。更に掘下げを進めると土師器出土地点より奥で、高杯（須恵器）1点、鉄釘が多数出土した。また鉄釘の出土した付近には2個の扁平な石が置かれ棺台かと思われた。これらの遺物が出土した直下に砂まじりの面があり床面となっていた。石室左側に集石がみられるが、盗掘時によせられた石かと考えられる。

最後に石室掘方を掘下げて調査を終えた。

1．古　墳

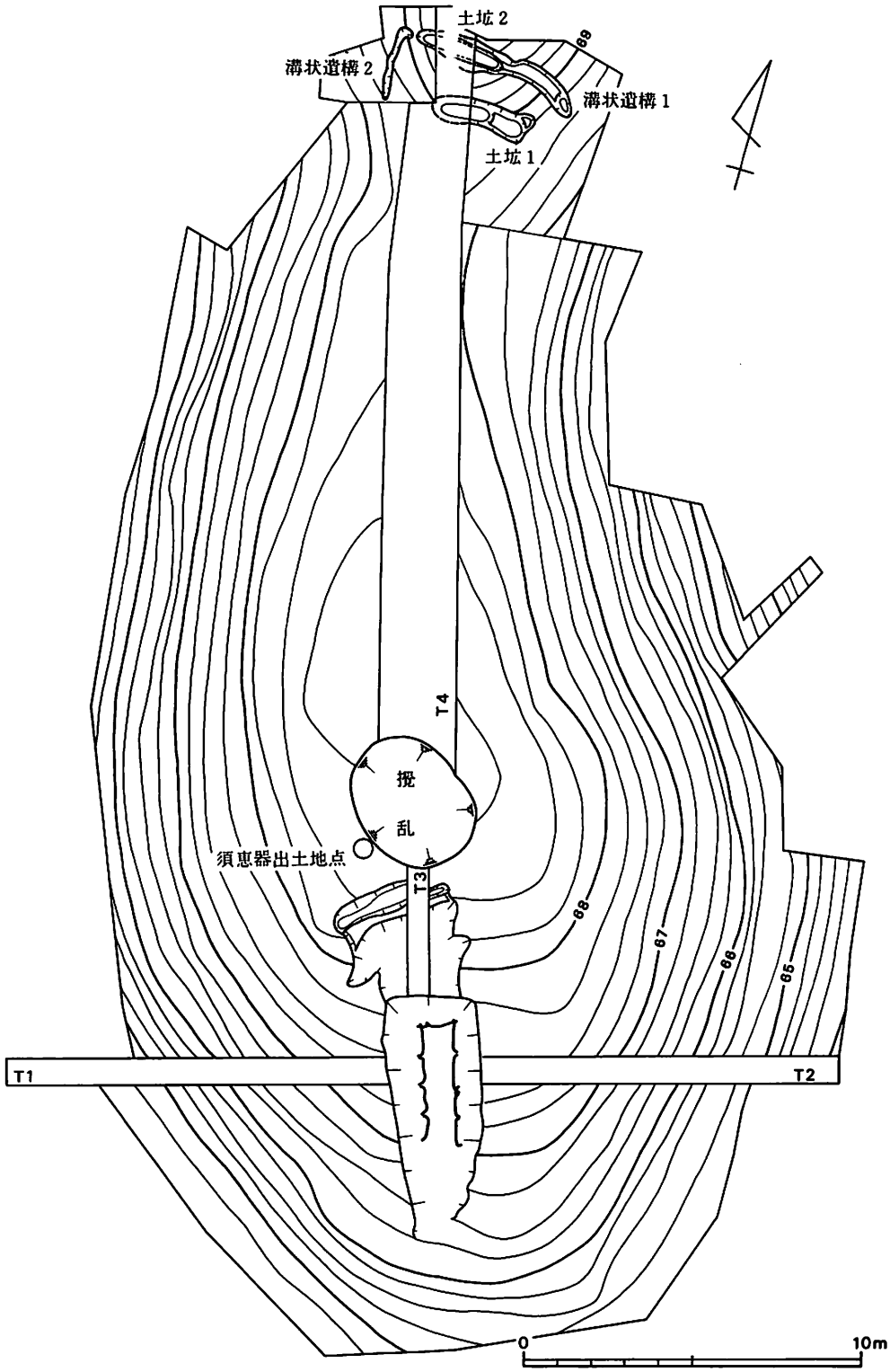
地山整形

表土（10～20cm）の下は直に花崗岩バイラン土の地山になっていたが、明らかな整地等の痕跡は認められなかった。わずかにT1トレンチの第5層の堆積する部分とT2トレンチの第7層が始まる部分が地山を削出しているようにみられた。

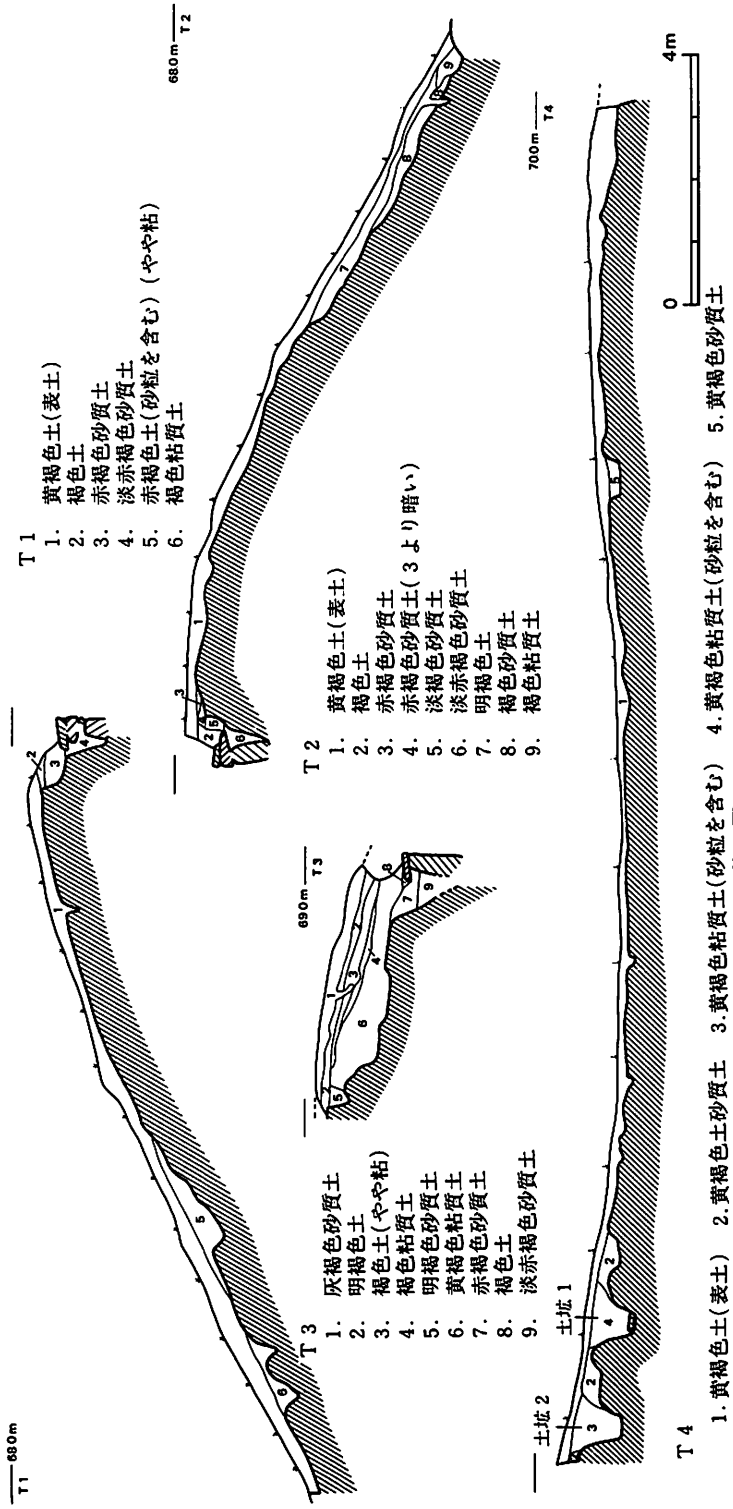
石室掘方は平面形羽子板状を呈し、上端部で長さ約7m、幅約3mの坑を地山から掘込んでいる。一部二段掘りの部分がある。床面はほぼ水平に削平されている。また掘方後方には段状の掘込みがある。不定形ながら長さ約3m、幅約3m、深さ50cmの規模をもつ。

墳　丘

墳丘盛土は認められず、流出してしまったものと思われる。尾根自体が一つの墳丘に見え、視覚的効果を充足していたのであろう。本来盛土は石室を覆う程度のものであったと考えられる。墳丘裾部ははっきりしないが、T1トレンチの第5層のある部分とT2トレンチの第7層の始まる部分がそれであるとすると、直径約16mの円墳となる。外表施設として、葺石・列石等は検出されていないが、周溝状の溝が石室背後にある。その規模は長さ約3.6m、幅約65cm、深さ20～30cmである。



第4図　遺構配置図

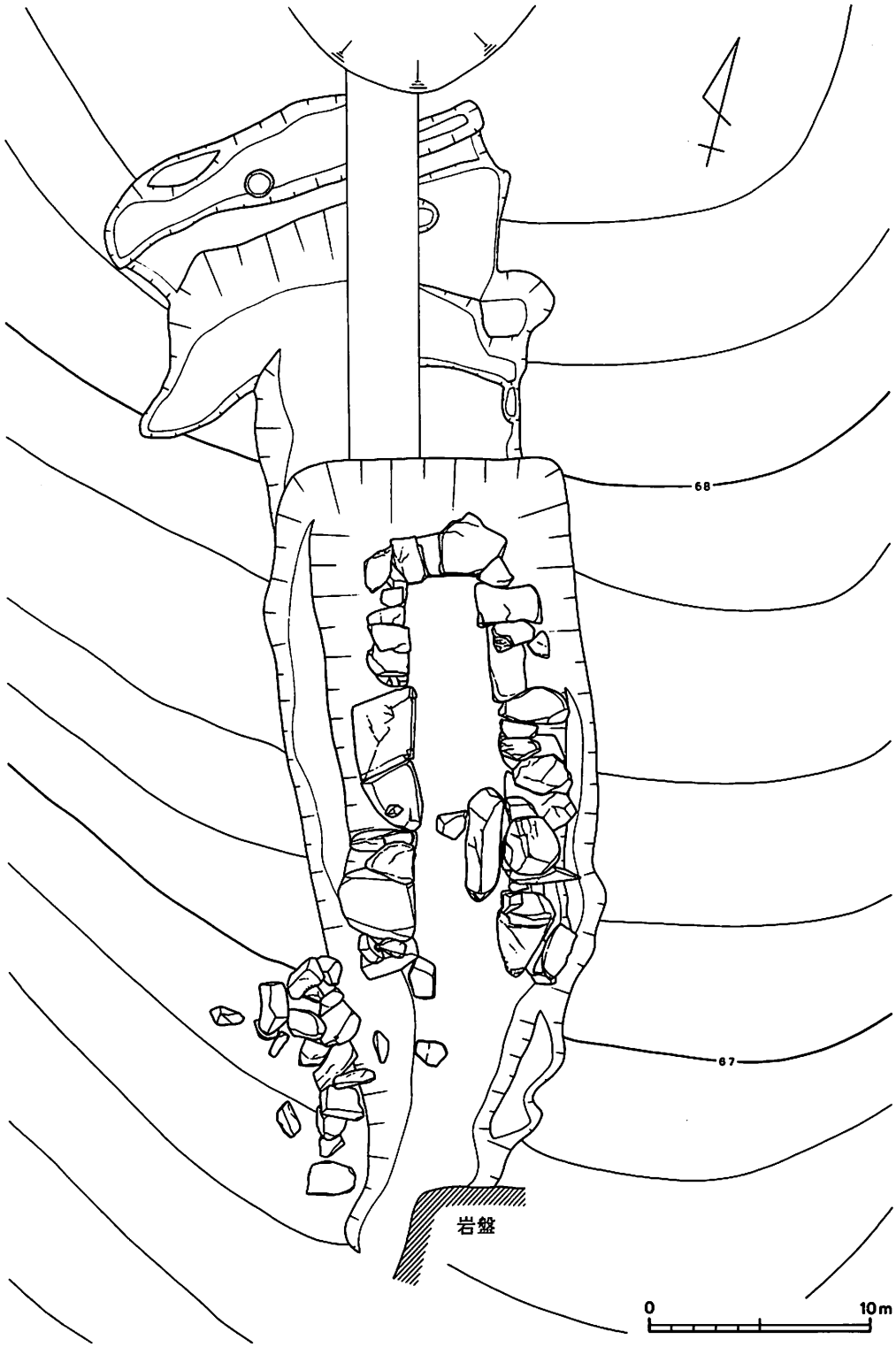


第5図　墳丘土層断面

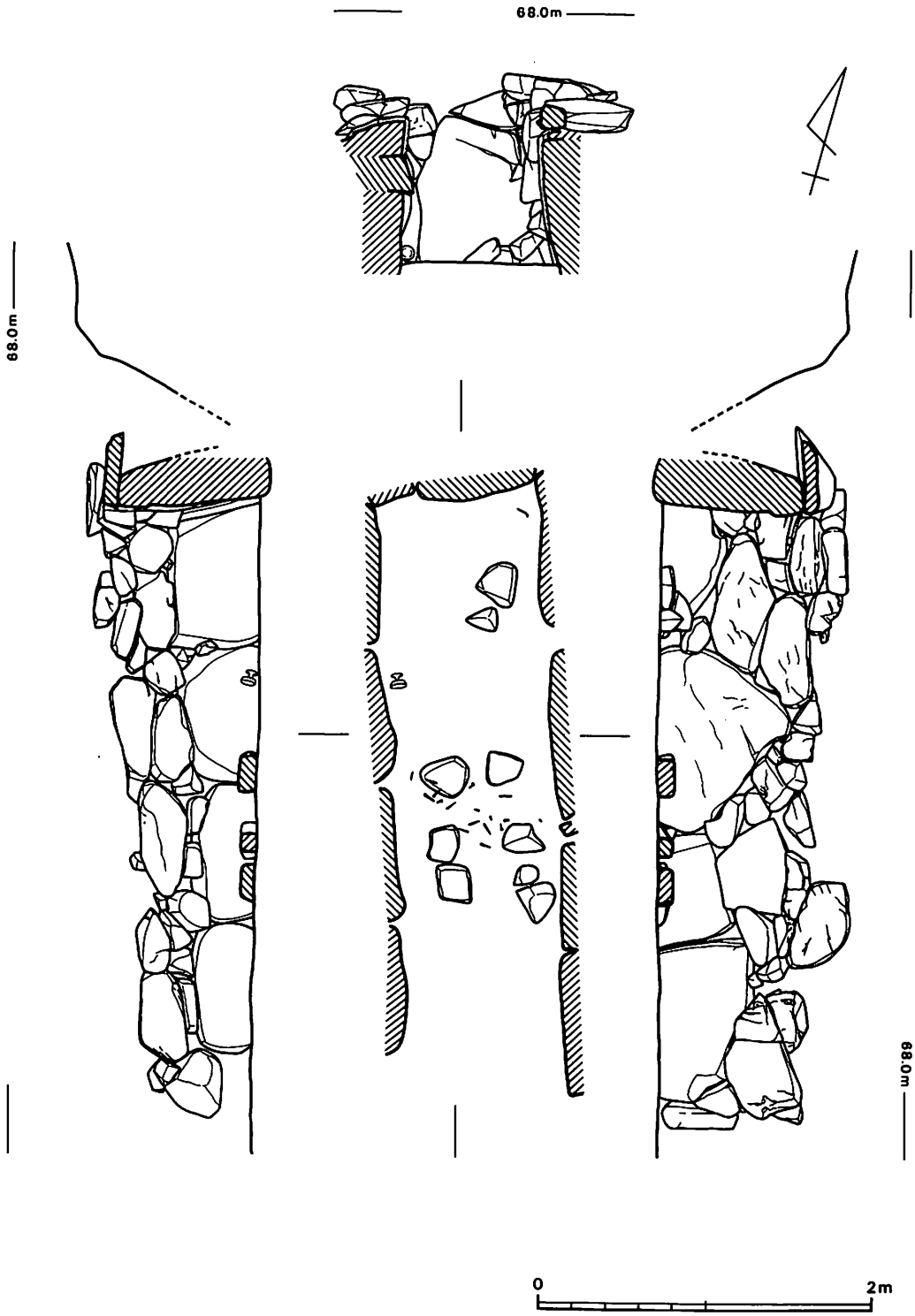
石室（第7図）

石室は南南東に開口する単室構造の横穴式石室であり、地山面から掘込まれた坑内に構築されている。主軸方向N19°Wを指向する。

石室の平面プランは長方形を呈し、長さ3.7m、幅は奥壁部で95cmを測りほぼ平行に両側壁が続いている。高さは奥壁で床面から95cmを測る。側石は左右ともに、四枚の大形の石を腰石として用いており4～5段の石積みが残っていた。左側壁の腰石は側面形が長方形の石を使用しており、奥壁際のものが最も大きい。腰石より上はやや大ぶりな石と小さな石を併用し小口を内に向けて積上げてある。側壁の最も前方の石は腰石よりやや浮いており、ここから前部が羨道となるものと考えられる。右側壁はやや内傾ぎみである。腰石には山形を呈するものがあるが、この石が8枚の腰石中で最も大きなものである。腰石より上部の構造は左側壁と同様である。奥壁



第6図　石室上面及び掘方実測図

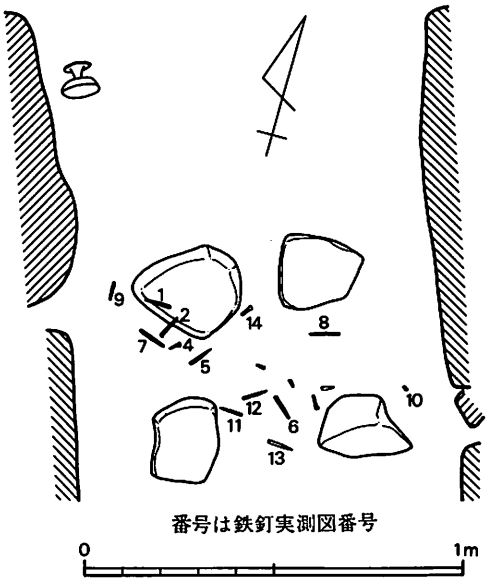


第7図　石室実測図

には90×70cmの石が一枚立てられ、左側の不足部を小ぶりな石４個で補っている。この状況から側壁を並べた後に奥壁を立てたものと考えられる。天井部は天井石が移動していて定かではないが右側壁の最も高い部分あたり、これにのせられていたものと思われる。

石室内にはいくつかの石が転落していたが石室中央部の扁平な２個の石と奥の石は、床面下にやや埋まり表面は平坦である。鉄釘の出土状態からみて棺台の可能性がある。床面はほぼ平坦で砂が奥壁部で顕著に認められた。

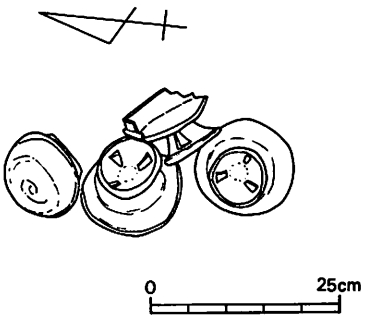
また石室から抜きとられたと思われる石材が、左側壁の前方に集石されていた。



第８図　石室内遺物出土状態実測図

遺物出土状態

盗掘を受けており、すでにいくらかの遺物は持ち出されていると思われるが、石室内からは須恵器２（皿、高杯)、土師器１（杯)、鉄釘が出土した。須恵器皿は羨道部から破片となって床面からかなり浮いた状態で出土している。土師器杯は玄室の前半部中央で床面から浮離し、押しつぶされたかたちで出土した。土師器の出土レベルには、保存状態の良い木炭が多く含まれていた。



第９図　墳丘上遺物出土状態実測図

第８図は石室中央部の遺物の出土状態である。須恵器高杯は左側壁際から杯部を前方に向け横位で出土した。脚部が若干欠けるのみでほぼ完形である。鉄釘は１点だけ奥壁右コーナーから出土した以外はすべて石室中央部で出土している。床面から10cmの幅で45×90cmの範囲に集中している。

尾根頂部の攪乱坑の南際からは須恵器４(杯身１、高杯３)と刀子１が出土している(第９図)。杯身、高杯２点（完形）はふせた状態で、高杯１点（発掘時に一部口縁部を欠損）は横転して出土した。また刀子は鉄製のものであるが、杯身の受部に接して出土した。

２．調査区北部遺構群

横穴式石室の北約30mの尾根鞍部上に近接して検出された遺構群で、土坑２基・溝状遺構２からなる。

土坑１（第10図、図版５ａ）　尾根主軸にほぼ直交して掘込まれた土坑で、その長軸方位はＮ86°Ｅである。長さ 100cm以上、幅77～80cm、深さ８～47cmの浅い土坑の西半に側壁を共有して土

坑１が掘られている。土坑１の規模は上端の長さ 190cm、上端の幅約80cm、下端の長さ 167cm、下端の幅35cm、深さは墓坑上面から55cm（西小口）で、ほぼ隅丸長方形の平面形をもつ。土坑１の底面はほぼ平坦で、その横断面形は上端がラッパ状にひらく所謂箱薬研掘りの形に近いものである。埋土は黄褐色粘性砂質土で、これは土坑２および溝状遺構１・２も同様である。坑底面において長さ５～45cm、幅10～30cm、厚さ７～25cmの長方形の板石・角礫群を検出した。中央では間隔をおいて２枚を敷石状に置き、東西両端ではやや厚手の石を２～３枚横積みにして、小口部をつくりだしている。東小口寄りの個所では大形の角礫が両側壁にもたれかかるようになっているが、これらは倒壊ないしは上方からの落込みの結果と考えられ、原位置にあるとは考えられない。側壁部分では特に南側壁において３～４ヶ所小形の板石を明らかに立て置いている。同様の板石は、北側壁にも１ヶ所存在した。

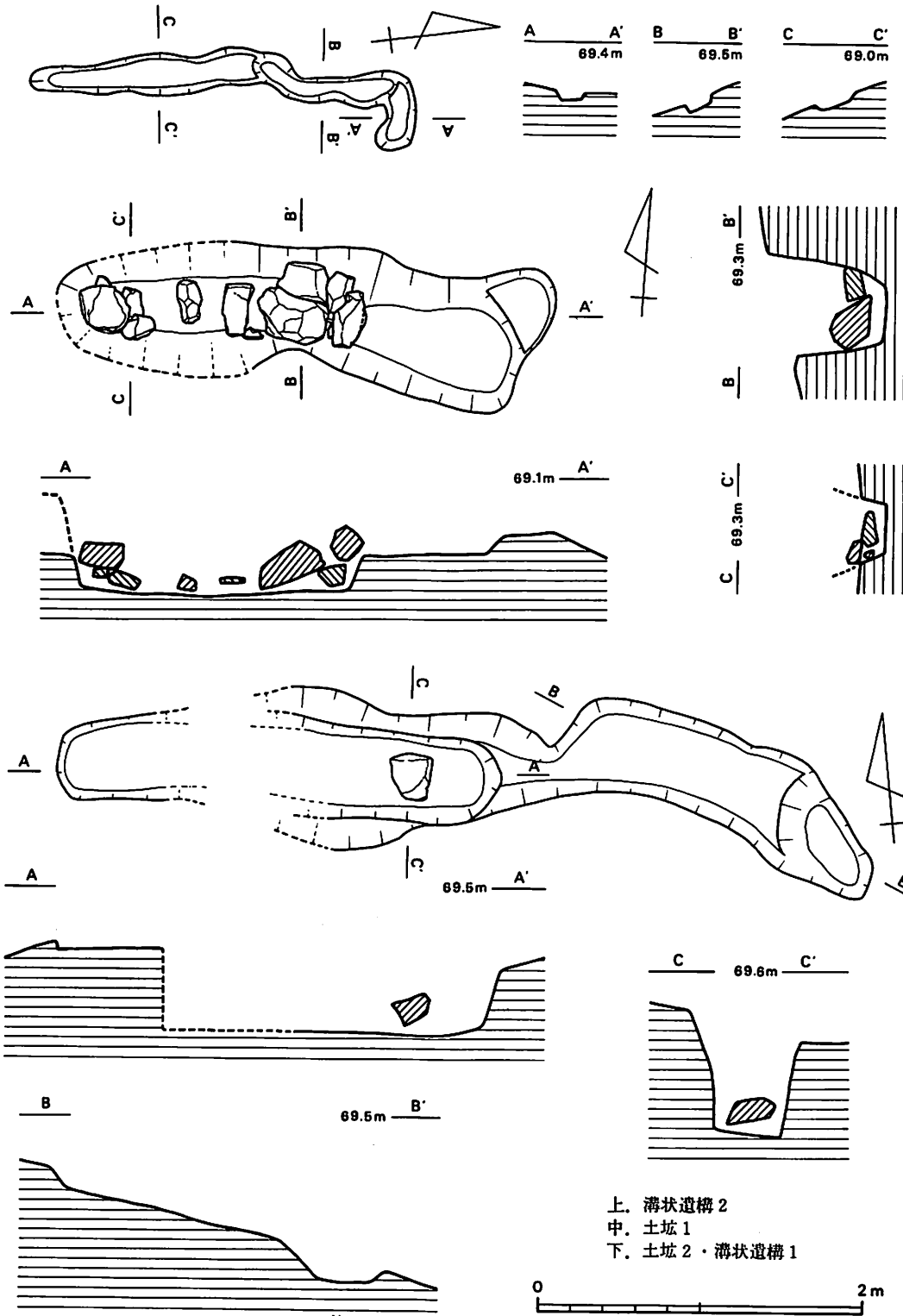
土坑１に伴う遺物は皆無だが、その構造・形態などから土坑墓として捉え、坑底の板石・角礫については箱式木棺の裏込めなどとして考えられようか。なお、板石・角礫の石質は花崗岩である。

土坑２（第10図、図版４ｂ）　土坑１に北接する。尾根主軸にほぼ直交し、その長軸方位はN 96° Eである。東端が南にカーブする溝状遺構１の溝底内の西に偏した位置に土坑２が掘込まれている。土坑２の規模は、トレンチによりその西小口部分を失っており全容は明らかでないが、現状では上端の長さ 121cm、上端の幅50～62cm、下端の長さ 110cm、下端の幅32～42cm深さは上面からで53～80cmで、平面形は隅丸長方形である。東小口に寄った位置の掘方底面では長さ28cm×幅26cm、厚さ15cmの方形の板石１枚を検出した。トレンチ掘りに際してもう一枚同様の板石を検出している。土坑１に比べ石組みの状況が明らかでないが、全体的な構造・規模・形態など南接する土坑１に類似する点が多く、同様に箱形木棺を主体とする土坑墓として考えておきたい。なお、この土坑２に伴うか否か明確ではないが、土坑２の上面付近で須恵器片３個体分（短頸壺・杯蓋・杯身各１）が出土している（第11図９・10）。

溝状遺構１（第10図）　尾根主軸にほぼ直交し、長さ 502cm、幅32～ 100cm、深さ２～23cmの規模をもつ。西半の溝底には側壁を共有して土坑２が掘りこまれている。

溝状遺構２（第10図、図版５ｂ）　土坑１、土坑２の西 0.1～１ｍの位置を尾根西斜面の等高線に沿って走り、北端で短かく東に屈曲しておわるが、僅かな間隔をおいて溝状遺構１が存在し、つながる可能性がある。長さ約 270cm、上端幅15～26cm、溝底は二段になっており北半が深く深さ４～14cm、その他の部分の深さは２～12cmである。

以上、丘陵尾根鞍部の遺構群の性格としては次のように考えられよう。即ち、溝状遺構２および１は一連のものである可能性があり、土坑１の西辺と北辺を画する性格をもつものと考えられ、土坑２は溝状遺構１の溝底に土坑１と主軸方向をほぼ並行させて築かれており、土坑１及び溝状遺構１・２に伴うものと考えられる。時期的には遺構群に確実に伴う遺物が皆無で明確にはしがたいが、土坑２上面より出土した須恵器片から６世紀代を中心とする時期を考えたい。



第10図　調査区北部遺構群実測図

Ⅳ 出 土 遺 物

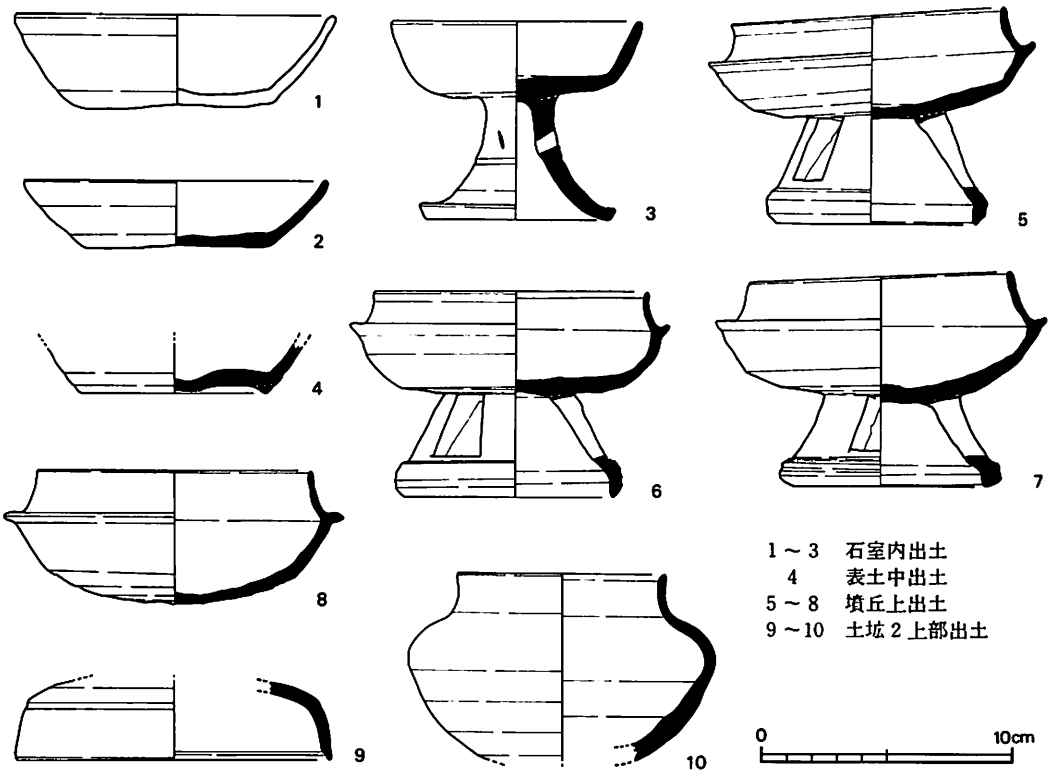
出土遺物としては、須恵器（杯蓋１、杯身３、高杯４、短頸壺１、皿１、他)、土師器（杯)1鉄刀子１・鉄釘がある。主な出土地点は石室内・墳丘上・土坑２上面及び表土中である。

１．土器（第11図、図版６）

１～３は鉄釘とともに石室内より出土した。高杯（３）は玄室西側壁際の床面直上で出土した。羨道床面からかなり浮いた状態で出土した皿（２）及び土師器・杯（１）との間に時期差が認められる。３は『陶邑』編年の第Ⅲ型式第２段階[1]にあたり、ほぼ７世紀前半の所産と考えられるのに対し、製作技法等類似する１[2]・２はより後出的で10世紀代を中心とした時期のものと考えられる。

高杯（５～７）・杯身（８）は石室背後の墳丘上において一括出土したもので古式須恵器の範疇に入る[3]。時期的には『陶邑』編年の第Ⅰ型式第５段階に属し、６世紀前半を中心とした時期のものと考える[4]。なお、７は全体に作りが粗雑で、形態・手法の面を含めて５・６との間に僅かながら差違を認めることができる。７の立上がり部外面には鉄刀子（第12図17）が付着した状態で出土した。

杯蓋（９）・短頸壺（10）は何れも少片で土坑２の上面で出土したものだが、土坑２に伴う



第11図　出土土器実測図

か否かは確定できない。ただ、横穴式石室内出土の3に先行し、墳頂部出土の5～8よりは後出的と考えられる。

高台付の杯身（4）は墳丘表土層より出土したもので、9～10世紀代の所産と考える。

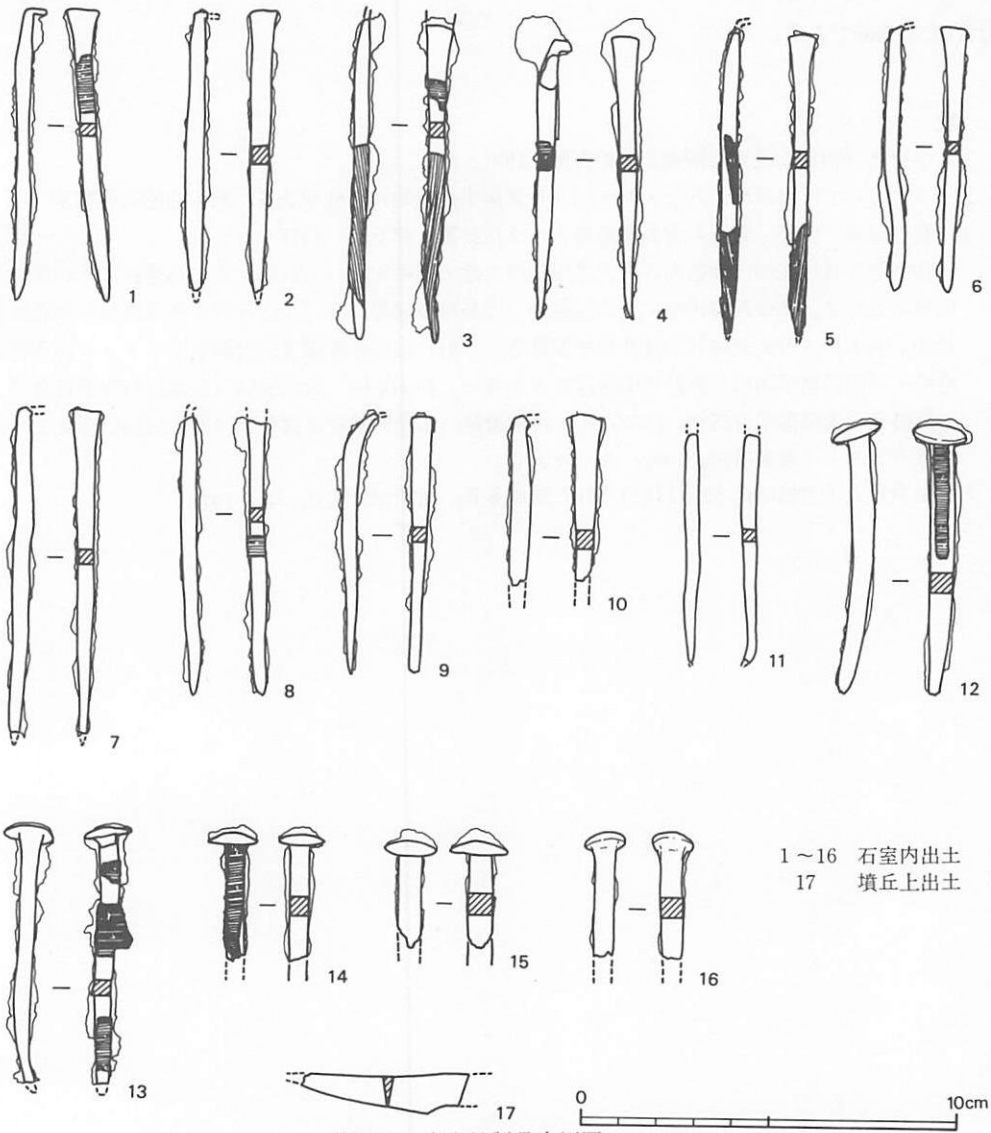
第1表　天高第1号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
第11図 1	杯	口径 12.6 底径 7.8 器高 3.7	平坦な底部から体部との境界の凹部を経て、やや内湾気味に立上り、口縁部で僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部は回転ヘラ切り。その他の部分は回転ナデ調整（ロクロ回転左方向）。	**色調**淡明黄褐色 **胎土**比較的精良 **焼成**良好 **残存**体部½
2	皿	口径 12.0 底径 7.6 器高 2.7	平坦な底部から体部との境の僅かな凹部を経て直線的に上外方に立上り、口縁部で僅かに内傾して直立する。端部はやや尖り気味。	底部は回転ヘラ切りの後ナデつけ。その他は回転ナデ（ロクロ回転右方向）。口縁部外面に黒斑状の自然釉少量付着。	**色調**暗灰色 **胎土**精良 **焼成**かなり良好 **残存**体部⅔弱
3	高杯	口径 10.0 脚基径 3.2 脚端径 7.8 器高 7.9 脚高 5.0	**杯部**平坦な底部から垂直に近く上外方に直線的に立上り端部はやや厚く丸い。 **脚部**ほそい脚基部からラッパ状に下外方に大きく開き、端部はやや上方にひきあげている。	**杯部**外底面から体部下端にかけて回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。内面に白斑状の自然釉付着。 **脚部**内外面とも回転ナデ調整を施した後、脚体部の3ヶ所に外面から刻み目状の小さな透しを穿つ。脚体部中央に浅い沈線1条がめぐる。	**色調**暗灰色～淡灰色 **胎土**やや粗い **焼成**かなり良好 **残存**ほぼ完形 脚端部欠損
4	杯身	口径 復元底径 7.8 現存高 2.0	断面逆三角形の低い高台を外底面端部に貼付。平坦な底部から体部との境の凹部を経てほぼ直線的に上外方に立上る。	内外底面中央はナデつけ調整。その他の部分は回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り。	**色調**淡灰色 **胎土**比較的精良 **焼成**良好 **残存**¼強
5	高杯	口径 10.9 受部径13.0 脚基径 5.5 脚端径 8.8 器高 7.9～8.7 脚高 4.5	**杯部**底部からやや強く屈曲して上外方に直線的に立上る。受け部はやや上外方にひきだし、端部を丸くおさめる。たちあがり部はやや強く内傾し、途中から直立気味に立上る。端部内面に内傾する面をもつ。 **脚部**太い脚基部から直線的に下外方にのび、端部近くで強く屈曲させてやや内傾気味に垂下する。端部は尖り気味。	**杯部**外底面ヘラ削り。内面から受け部にかけて回転ナデ調整（ロクロ回転右方向）。体部外面上半に黒斑状の自然釉付着。 **脚部**内外面とも回転ナデ調整後、脚体部3ヶ所に長方形の透しを等間隔に外面からの切りこみにより設けている。脚体部外面に白斑状の自然釉付着。	**色調**淡灰色～暗灰色 **胎土**精良 **焼成**良好 **残存**ほぼ完存
6	高杯	口径 11.0 受部径12.7 脚基径 5.2 脚端径 9.0 器高 8.2	**杯部**平坦で浅い底部から緩かに屈曲しながら直立気味に立上る。 受け部は上外方に短かくのび、端部は丸くおさめる。たちあ	**杯部**外底面は回転ヘラ削り。その他は回転ナデ調整。 **脚部**内外面回転ナデ調整後、脚体部に等間隔に3ヶ所長方形の透しを外面から切りこみ	**色調**淡青灰色～淡灰色 **胎土**比較的精良 **焼成**良好 **残存**ほぼ完存

番号	器　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
6	高　杯	脚高　4.1	がり部は内傾してやや外湾気味に立上り端部付近で直立する。端部は内傾するせまい平面をもつ。 **脚部**脚基部から直線的に下外方にのび端部付近でやや内傾気味に垂下する。端部は尖がる。	を入れて設ける。	
7	高　杯	口径 10.25 受部径13.2 脚基径 5.4 脚端径 8.8 器高 8.1～8.6 脚高　3.7	**杯部**深く丸い底部から内湾気味に上外方に立上る。受け部は短かく上外方に引きだし、端部は丸くおさめる。たちあがり部は内傾してやや外反気味に立上る。立上り部はハリツケによる。 **脚部**低い高台は脚基部から直線的に下外方にのび、端部近くで短かく屈曲し垂下する。端部尖り気味。	**杯部**外底面から体部下半にかけて回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。脚部内外面とも回転ナデ調整。体部３ヶ所に間隔不揃いの長台形の透しを外面からの切込により穿つ。	**色調**暗青灰色 **胎土**やや粗い。 **焼成**比較的良好 **残存**ほぼ完存、立ちあがり部一部欠損
8	杯　身	口径 10.95 受部径13.5 器高　5.3	深く丸い底部から緩かな屈曲部分を経て直線的に上外方にのび、横方向に受け部をひきだす。端部厚い。たちあがり部は強く内傾させて直線的に上内方にのび、端部近くで直立気味に立上る。	外底面は粗い回転ヘラ削り。内底面中央ナデつけ。他は回転ナデ調整。外面受け部から体部にかけて白斑状の自然釉付着。	**色調**暗青灰色 **胎土**比較的精良 **焼成**良好 **残存**ほぼ完存
9	杯　蓋	復元口径 12.6 現存高 3.1	比較的明瞭な稜をもち、浅い沈線を介して、やや外方に開き気味に垂下する口縁部に続く。端部は尖り気味で内面には中央が僅かに凹み内傾する面をもつ。	天井部外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整を施す。他は回転ナデ調整。	**色調**青灰色 **胎土**１㎜内外の微砂粒やや多し **焼成**かなり良好 **残存**小破片３点
10	短頸壺	復元口径 8.3 復元胴径 12.2 現存高7.45	口縁部は頸部からやや外反気味に直立する。端部内面に内傾する面あり。胴最大径はかなり上位にあり、所謂肩がはった感じに近い。ここから丸く底部に続く。	胴部最大径部より上半の外面から内面にかけて回転ナデ調整。最大径部より下位は回転ヘラ削り十回転ナデ調整、底部は回転ヘラ削り。	**色調**内外面暗灰色 **胎土**比較的精良 **焼成**良好 **残存**⅙

2　鉄製品

１～16は鉄釘でいずれも石室内より出土したものである。図示した以外に５点の破片がある。すべて断面形は四角形であるが、頭部の形態から２種類に分類が可能である。Ａ類、頭部付近でやや幅を広げ折れまがる細身のタイプ（１～11）、Ｂ類、円形で鋲のような頭部を有するタイ



第12図　出土鉄製品実測図

プ（12～16）に区分される。A類は長さ約7～9㎝、太さ4～5㎜。B類は長さ約7㎝、太さ6㎜程度である。木質の遺存状態は悪く木棺のいずれの部分に使用されたものか限定し難い。A類では1・3・5にみられるように、先端から中位にかけて縦に木目が残り、上部は横に木目が残る。B類では12・13・14に遺存するが、いずれも横位に木目が通っている。このA・B二種の釘が同時に使用されたものか、別個の木棺に用いられたのかは、出土状態からは判別できなかった。しかし二種の釘には大きな時間的な差はないようである。[(4)]

17は刀子である。墳丘上で出土した4個の須恵器と同時に出土したもので、杯身の受部に接

して出土した。先端部と中子以下を欠くものの、現存長は4.5cm、刃部長 3.4cm、最大幅 1.1cm、刀背幅 2.5mmである。

註

1．中村浩『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981、他

2．2については御調郡久井町・熊ヶ迫3号窯跡出土遺物に類例がある。向田裕始氏御教示。

3．新谷武夫「安芸・備後の古式須恵器」古文化談叢　第5集　1978
に1978年9月現在の広島県内の古式須恵器出土地の詳細が述べられている（44遺跡)。その後の追加資料として、深安郡神辺町・小山池廃寺（広島県教育委員会『小山池廃寺第3次発掘調査概報』1980)、同・神辺御領遺跡（広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡ー神辺農業協同組合御野支所建設にかかるー』1980)、同・大宮遺跡（広島県教育委員会『大宮遺跡第5次発掘調査概報』1982)、同・渡瀬遺跡（広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター『渡瀬遺跡』1982）などがある。

4．田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」考古学研究25―2　1978

V まとめ

以上、天高第１号古墳発掘調査の概要について述べてきた。ここではあらためてその成果を述べまとめとしたい。

本古墳の内部主体は、羨道部は遺存しないが単室構造の横穴式石室である。墳丘は明確でないが、約16mの円墳と把握しておきたい。築造年代は、遺物量が少ないが玄室内出土の須恵器から判断して７世紀前半頃と考えられる。県内における横穴式石室の採用時期は６世紀後半以降とされている。尾根頂部の撹乱坑際から出土した須恵器は６世紀前半に比定されるものであり、[1]横穴式石室に伴うものとは考え難い。この種の須恵器は主体部の近くに供献される例が多く、[2]おそらく撹乱によって失なわれた部分に別の古墳が存在していたのであろう。羨道部及び石室前半部から出土した土器は10世紀代のもので、古墳築造時よりかなり時間的隔たりがある。追葬時の副葬品とするには躊躇され、何らかの理由により供献が行なわれたものと考えたい。古墳からは小舟木の集落が望めるが、この開析谷に生産基盤を有した人物が埋葬されたものであろうか。本古墳と同様に、尾根頂部からやや下った斜面に立地する古墳としては東広島市西条町所在の奥田大池古墳[3]・鏡東谷古墳などがある。

本郷町の後期古墳、特に７世紀代に入る古墳については発掘調査の行われた例がなく不明な部分が多い。本古墳群の付近には矢跡古墳群・神ノ木古墳群が所在している。横穴式石室を持つ古墳としては梅木平古墳、御年代古墳、貞丸第１・２号古墳のような立派な石室を有し家形石棺が納められるものと、[4]本古墳と同規模である矢跡第４号古墳、大菜原第４号古墳などの別がある。前者のような極めて特色の強い畿内的古墳と後者のような在地的古墳に葬られた人々がどのようにかかわっていたかが古墳分布の上でも、集団構成の上でも今後の問題となってこよう。

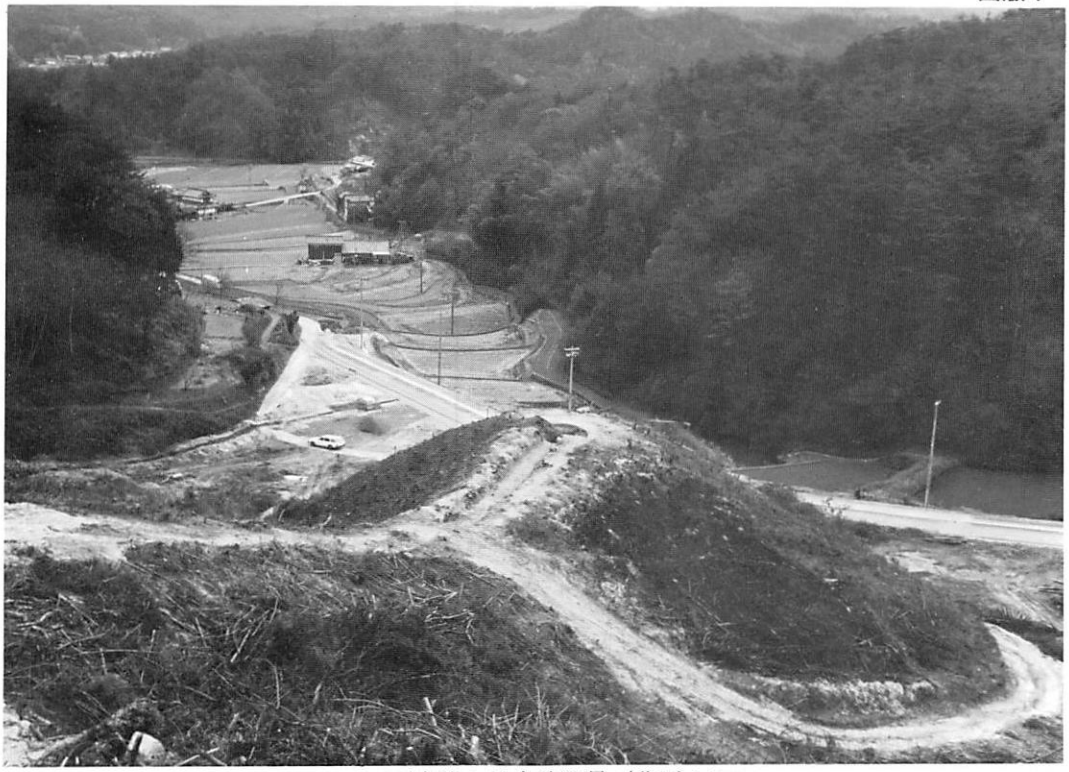
調査区北部の遺構群はトレンチに分断され、一部不明な部分があるが、土坑１・２、溝状遺構１・２が検出された。土坑１と土坑２では土坑内の礫の量が違い一概には言えないが、木棺を納めた土坑墓であると考えられる。所属時期については明確でないが、土坑２の上部より出土した須恵器は、前述の古式須恵器よりは後出的な形態を示しており６世紀代に比定される。土坑に明確に伴って出土していないので確かなことは言い難いが、古墳時代の土坑墓とみてさしつかえないであろう。溝状遺構は２基の土坑の墓域を区画するものであろう。

このように今回の調査では本郷町の後期古墳の一資料を提供し、古式須恵器の出土例を増加させ、予想外の土坑墓群を検出して、大きな成果をあげることができた。今後これらの資料がこの地域の歴史解明の一助となることを期待する。

註

1．中村浩『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981

2．新谷武夫「安芸・備後の古式須恵器」古文化談叢　第5集　1978
3．広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター『奥田大池遺跡』　1983
4．梅木平古墳には家形石棺はない。



a　天高第 1 号古墳遠景（北西より）

b　調査後の遠景（北西より）

a　表土剝ぎ後（南より）

b　T_3トレンチ土層断面

a　石室全景（南より）

b　石室内遺物出土状態（南より）

a　墳丘上遺物出土状態（西より）

b　土坑２（西より）

a　土坑１（西より）

b　溝状遺構２（北より）

1

2

3

5

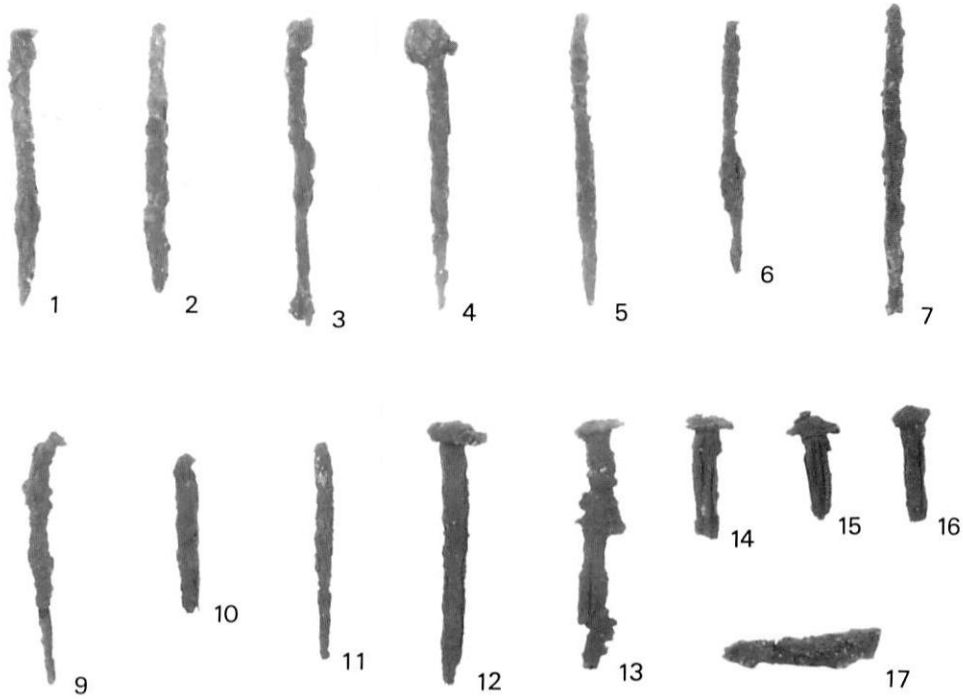
6

7

8

10

出土遺物（1）



出土遺物（2）

昭和58年(1983) 3月31日

天高第1号古墳

編集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター

発行 広島県教育委員会

印刷 大村印刷株式会社